

Eureka XI

六年制通信 No.38 令和6年2月29日(木)号

孤独を恐れるな

「なんて」という言葉を辞書で引くと、この言葉には「軽視する」意味合いがあると書いてあります、と言っても『大辞林』だけですけどね。『広辞苑』には書いてありません。テレビなんて観ていないで…、カメラなんて触っていないで…、などと言えばテレビやカメラを軽視した発言となり、例えばカメラを大切にしている人からすれば許しがたい気持ちになるかもしれません。発言者の意図を遥かに超えて相手を傷つけてしまうかもしれません。辞書の「なんて」を引いて、そう言えば自分はよくこの言葉を使っていた、軽視の意味が含まれるとは知らずに使っていた、辞書はそのことを教えてくれた、そんなシーンが最近観たテレビドラマにありました。私の大好きな「舟を編む」です。すでに映画とアニメはあるのですが、ドラマ(全10話)は初めてですね。面白いから皆さんもいかがですか。日曜日夜10時、NHKのBSです。本、映画、アニメ、いずれも主人公は大学院で言語学を専攻した変わり者(?)馬締光也、これで「まじめ」と読みます。ドラマの主人公は辞書編集部へ配属された岸辺みどりで、彼女の目を通して辞書作りに懸ける現場を描くわけですね。映画では馬締の下宿のシーンが何度も出てきます。文机(これ、ちゃんと読みましたか)に向かい辞書を片手に本を読んでいるシーンですが、電気スタンドの灯りとトラさんという猫以外は本しかない空間に馬締がたった一人集中して読書をしている、辞書編集部に入ってから下宿に持ち帰って校正をしている鬼気迫るシーンもありますが、常に馬締は一人です。しかし、そこにはマイナスの意味での孤独感を感じ取れません。むしろ、非常に幸福な空間として描かれているようで、私は羨ましく思いながら観ていました。

馬締光也の暮らす静かな環境は今ではよほど意識しないと作れないかもしれませんが、今の騒々しい世の中だからこそ、せめて家にいるとき、自分の部屋にいるときくらいは孤独な時間を楽しむことを覚えてほしいと思います。

孤独と孤立は違うという人がいます。なるほど、孤立には孤独以上に負のイメージがありますね。確かに私たちも仕事をしていて孤立すると同調圧力が鬱陶しく感じる時がありますが、孤立も突っ切ってしまうと「孤高」と呼ばれ、ある種の敬意を払われる存在になるようです。とにかく一人の時間を大切にすることが、今の時代は特に求められているように思います。いや、求めなければいけないと思います。自由律の俳人尾崎放哉(ほうさい)に「咳をしても一人」という句がありますが、これなど孤独と孤立の両方を引き受けているように思えます。しかも、孤独も孤立も負のイメージとしてとらえられていません。何となくユーモアさえありますね。

お釈迦様も「犀の角ようにただ独り歩め」と言っています。犀は群れることのない動物ですから、「犀の角」というのは「孤独」の枕詞のようなものです。世の中に数多ある軋轢も自分の中にある煩惱も、畢竟人間関係に帰すると言っても過言ではないでしょう。煩惱から逃れる道は「ただ独り歩む」ことだと、お釈迦様は言っているのでしょうか。仏教の教義は知りません。しかし人との無益な繋がりを戒めた言葉のように私には思えます。私たちは家の外ではどうしても一人だけの時間を持ちにくいものです。誰かと「繋がって」生活をせざるを得ませんからね。そして精神は疲弊します。誰一人として自分と全く同じ感性の人間などいないのですから、傷ついたり傷つけたりして生活せざるを得ません。人は傷つくことには敏感でしょうが、傷つけて生きていることには鈍感なものです。これは人間の弱さだね。傷ついても傷つけても心はすり減ります。ですから一日のうちで人との繋がりを絶つ時間をもって、疲れた精神と弱った心を回復させる必要があると思うのですが、君たちはそう思いませんか。しかし現代は、本来一人でいられる「回復の時間帯」でさえも顔の見えない誰かと「繋がっていたい」と考える人が多いように思えて心配です。君たちの年齢の子たちが顔も名前も性別も年齢もわからない匿名の人であっても「繋がっている」ことに安心すると聞くと、私たち大人は不安です。どうか意識して一人きりの時間を持つようにしてくださいね。

今週のおすすめ

・清水義範 『日本語必笑講座』 (講談社文庫)

この本、以前どこで紹介したかと調べてみたら、「ユリイカV」のNo.26でした。6年前ですな。自分で書いたのを読んで笑ってしまった。面白いので再掲します。

清水さんの『国語入試問題必勝法』(講談社文庫)の方が有名でしょうが、ま、どちらも面白いと思います。『日本語必笑講座』では政治家やアナウンサー、広告に至るまで不思議な日本語を俎上に載せています。笑った後に、いやいやこれは笑い事ではないぞと思ってしまう、そんな例が満載です。中にひとつ私のお気に入りがあるので紹介します。名古屋における「えーていかんて論争」です。名古屋において「ここは私がおごるわ」、「いやいやそんなことしてもらわなくて結構です」という、レジ前で行われる二人のおばさまたちの会話なのですが、名古屋弁がわからないと笑えないかな。

「今日は私がはらうわ」

「あ、いかんて、いかんいかん」

「えーて、えーて、えーて」

「いかんて、いかんて」

「たまには、ええでいかんがね」

「いかんでかんて。そうはいかんもんで」

「えーて、えーて」

「いかんて。本当に奥さん、それはいかんで、ええわね」

この本にはこんなのがたくさんあります。面白いよ。

BGMはカーペンターズのジャンバラヤでした…。